

撮影術

映画カメラマン大津幸四郎の全仕事

私は朝鮮半島と広島をテーマにドキュメンタリー映像を自主制作している。2作目の編集を依頼した方から「がっかりだよ。もっといい画があると思っていたのに」と言われた。最初少し力チンときて、すぐに落ち込んだ。自分が撮った映像がそんなにひどいもの

だとは思っていなかったの。何が悪いのか分からず茫然とした。それでもなんとか使える画像を取り込み作品は完成した。お陰様でミニシアターなどで公開して

いた。だくまでになったが、撮影は重要課題として残った。本書は著者と関わってきた方々との対談と、著者が行ってきた仕事の歴史を振り返る文章で構成されている。使用した機材やカメラワーク、撮影方法について、具体的な場面を例に挙げ詳細に説明し、フレームにどの情熱を込めたかが語られる。著者は三里塚で逮

捕されている。この時、捕まるかもしれないことまで想定し別のカメラを用意していたという。「その頃は毎朝起きると、メシ前に一キロから二キロ走っていた。とにかく走るしかない。畑の真ん中を。初めからアクション映画だというのがあるからね」。計算ずみだ

った速捕のシーンは迫力と共深い印象を残した。さるが、小川はどちらかという風に「人間の撮りに私は本書で日本を代表 えば自分の感覚で物事を

使して物事をつかもうとするが、小川はどちらかという風に「人間の撮りに私は本書で日本を代表 えば自分の感覚で物事を

戦後の日本社会を見つめたカメラマンの技を知る

イトウ ソノミ



A5判・288頁・3570円
以文社
978-4-7531-0316-4

読物文化

ないものには自分も写っていることをわかってい

実著者の仕事の中で私

の作品の原点となったものがある。在日コリアンの被爆者と在韓被爆者の証言を集めた『もうひとつのヒロシマ アリランのうた』(朴壽南監督)だ。ここでは日本の植民地政策に対する強烈な批判が描かれている。これは私が制作をしている作品のテーマにおいて重要な視点だ。朝鮮人被爆者はあまり映画化されていないため、この作品について触れられていなかったことが少し残念だった。(いとう・そのみ氏ドキュメンタリー映像作家)

★おおつ・こつしろう氏は映画カメラマン。岩波映画製作所に入社し撮影助手を五年間務め、以後フリーランスに。小川紳介、土本典昭、佐藤真ら日本のドキュメンタリーの旗頭と共闘。現在、三里塚で農業を続けるかつての闘志たちを四十年ぶりに訪ねて長編ドキュメンタリーを撮影中。一九三四(昭和9)年生。

た。著者の大津幸四郎氏は、ドキュメンタリーの金字塔ともいえる土本典昭監督の「水俣」シリーズや、小川紳介監督の「日本解放戦線・三里塚の夏」などのカメラマンとして、日本のドキュメンタリー史に名を残す人物の一人である。間違

た方々との対談と、著者が行ってきた仕事の歴史を振り返る文章で構成されている。使用した機材やカメラワーク、撮影方法について、具体的な場面を例に挙げ詳細に説明し、フレームにどの情熱を込めたかが語られる。著者は三里塚で逮

捕されている。この時、捕まるかもしれないことまで想定し別のカメラを用意していたという。「その頃は毎朝起きると、メシ前に一キロから二キロ走っていた。とにかく走るしかない。畑の真ん中を。初めからアクション映画だというのがあるからね」。計算ずみだ

った速捕のシーンは迫力と共深い印象を残した。さるが、小川はどちらかという風に「人間の撮りに私は本書で日本を代表 えば自分の感覚で物事を

使して物事をつかもうとするが、小川はどちらかという風に「人間の撮りに私は本書で日本を代表 えば自分の感覚で物事を

使して物事をつかもうとするが、小川はどちらかという風に「人間の撮りに私は本書で日本を代表 えば自分の感覚で物事を